

学芸員 NEWS LETTER

2022.3

立命館大学 文学部

第34号



京都市東山区・五条坂京焼登り窯（旧藤平）の3D写真測量の様子（2021年10月25-29日）

目次

| | |
|------------------------------------|---|
| ■ コロナ禍の考古学実習と測量調査の試み—2021年度考古学実習Ⅲ— | 2 |
| ■ 博物館実習(館園実習)レポート | 4 |
| ■ 学芸員課程報告 | 7 |
| ■ 呉市海事歴史科学館(大和ミュージアム)に勤務して(久保健至) | 8 |

コロナ禍の考古学実習と測量調査の試み

— 2021 年度考古学実習Ⅲ —

文学部人文学科日本史研究学域 考古学・文化遺産専攻 教授 木 立 雅 朗

コロナ禍による実習計画の変更

2021 年度考古学実習Ⅲ（2 回生以上）では夏期休暇中の 8 月後半～9 月前半、京都市東山区に所在する五条坂京焼登り窯（旧藤平）の発掘調査と 3D 写真測量の実施を企画した。しかし、コロナ禍で緊急事態宣言が発出されたため急遽調査を延期し、後期に代替の実習講義を行なった。実習講義は、本来、密接な指導が必要だが、「三蜜を避ける」という難しい条件のもとで行なわざるを得なかった。

代替の実習は 10 月から 12 月の土曜日のうち、13 日間をあて、感染対策のために各回の参加人数を 5～10 名程度に制限して実施した。受講生はそのうち、6 日間参加し、毎回レポートを提出した。感染の広がりを受けて各種の事情を勘案し、時間数が不足する場合には、別途追加の実習を行なって対応した。このような形態の実習では連続して発掘調査に参加する体験には及ばないが、その代わりに多様な実習を盛り込んだ。また、3D 測量は感染が緩やかになった 10 月 20 日～29 日、早稲田大学との共同調査で実施した。

亀岡市篠窯跡群の分布調査

10 月 2 日、9 日の両日にわたり、亀岡市篠窯跡群の分布調査を行なった。篠窯跡群は奈良・平安時代の須恵器窯跡群であり、瓦や緑釉陶器も焼成している 10 月 2 日は粘土採集を中心に、10 月 9 日は遺物採集を中心に活動した。特に緑釉陶器の専用窯と想定される黒岩支群の踏査を行っており、大量の焼台を採集した。

10 月 16 日・23 日、11 月 27 日にはその採集遺物の洗浄と注記・計測、および採集粘土による製作実験を行なった。考古学実習で遺跡から粘土採集を行い、その製作実験を行なう事例は少ない。黒岩支群で採集した焼台の型式分類・大きさの計測を行い、3 次元グラフを作製した。採集から計測・製作実験・データの検討までの過程を経験できたことは実習生にとって貴重な経験になったと思う。緑釉窯の基礎的なデータとしても貴重なものである。

戦前の友禅図案の修復とデジタル・アーカイブ

11 月 13 日、20 日には戦前の友禅図案の修復とデジタル・アーカイブを行なった。他の実習とは異質だが、文化遺産の修復とデジタル・アーカイブは、どのような資料であっても重要な作業である。友禅図案は原寸のデザイン原画であり、立命館大学アート・リサーチセンターで膨大な資料を収集し、デジタル・アーカイブを進めている。実習ではその作業の一環を体験し、データベースの重要性と一連の技術を学ぶことができた。修復は微小点接合法による簡易な方法を用いたが、多様な文化遺産に応用できる方法である。伝統的な染織産業の拠点である京都には類似した図案類が膨大にあるはずだが、十分な保存・活用がなされていないため、本実習のような基礎的な作業を進めてゆく必要があるだろう。



篠窯跡群分布調査の様子（柿ヶ谷 1 号窯）



友禅図案のデジタル・アーカイブ

近世石造物の実測作業

11月6日、20日には、近世石造物の実測作業を行なった。京都市内の一石五輪塔を借用して実測・拓本の基礎的な作業を行なった。こうした石造物も京都市内には多数存在し、一部は散逸しつつあり、基礎資料を蓄積する重要な作業である。

近現代窯業に関わる民具の計測作業

11月27日・12月4日には京焼登り窯で使用された「ごう」（匣鉢）の整理・計測作業を行なった。「ごう」とは、登り窯に作品を詰める際に用いる容器である。中に作品を詰めて高く積み上げることができる上、直接灰がかからないようにできる。昭和40年代まで使用されていたと想定される現代の資料だが、登り窯の使用が禁止されてからは使用できない「民具」として工房の一角を占め続けてきた。すでに多くの資料が廃棄されているため、残り少ない登り窯の民具として重要である。

五条坂京焼登り窯（旧藤平）の3D写真測量（表紙写真）

感染の端境期に早稲田大学の余語琢磨研究室・田畑幸嗣研究室との共同調査で登り窯の3D写真測量を行なった。8月中に基準点の設置作業を終えていたため、10月20日に周囲の掃除と撮影準備作業を行い、10月25日～29日に写真撮影を行なった。ほとんど入ることができなかった胴木間や煙室・煙道の内部についても詳細な撮影を行なうことができた。煙室では多量の灰が集積しており、体中、灰まみれになった測量だった。ちなみに、煙室撮影者はお風呂で髪の毛を洗うとき、いつまでもシャンプーが落ちず、不思議に感じたという。髪の毛も灰で強アルカリ性になったのだと思われる。調査中もマスク着用で作業を行なったが、この調査ではコロナ対策だけでなく、灰・煤・埃対策の意味合いが大きかった。また、工房や倉庫部分など、登り窯周囲の3D化も試みた。覆屋の屋根構造も含めて、来年度、再度発掘調査と補足測量を企画している。

なお、この調査に当っては京都市教育委員会教育環境整備室の協力と理解を頂いた。記して感謝の意を表したい。

コロナ禍とともに

夏期休暇中に設定した考古学実習Ⅲは2年続けて大きな制限を受けた。昨年度までは「いずれ終息するだろう」と安易に考えていたが、もはや、そのような希望的な観測は通用しないだろう。もちろん終息を望んでいるのだが、このような情勢のなかで、どのような形なら実習や調査研究を安全に進めてゆくことができるのか、柔軟で冷静な実践活動を積み上げてゆく必要がある。コロナ禍でも対応できる新たな実習や研究の方法を検討してゆきたい。

今回の実習は例年に比べてはるかに多様であったが、それゆえに浅い実習になった側面も否定できない。受講生各自の研鑽に期待したい。



近世石造物の実測作業



「ごう」（匣鉢）の計測作業

北海道博物館で実習を受けて

文学部 考古学・文化遺産専攻 菅井佳穂

今回私は、北海道札幌市厚別区に位置する総合博物館である、北海道博物館にて8月17日から27日の計10日間の実習を受けさせていただいた。1日目はワクチン接種の副反応で休んだため、実際に実習を行えたのは9日間であった。これについては事前に電話にて博物館にご相談・説明をし、了承も得ている。

まず9日間何をしたか簡単に書いていく。1日目午前は、博物館で使用しているデータベースの記入項目や使用方法、活用方法についての勉強をした。午後は博物館の図書の中から一冊自分で選んでその本の紹介のポップをつける作業を行った。作成したポップは実際に来館者の方に見ていただくということで、様々な背景や考え方を持つ読む側の人の気持ちを考えて文章を作るというのは難しかった。他の実習生の作成したポップや、作成の際に気を付けた点や工夫点を聞くと自分の考えなかったことが多くあり、とても面白かった。

2日目午前は、総合展示の主に2階の展示を作成した学芸員さんに展示作成の際の工夫等について説明していただいた。その後午後にかけて寄贈された資料の整理・写真撮影を行った。私が扱った資料は昭和の指貫や眼鏡、フィルムケースに入れられた待ち針、何かをメモがされた板に巻き付けられた紐など、生活の何気ないものだった。しかし、整理を行うために注意深く見ていると、昔使っていた人の生活が見えてとても面白かった。また、写真撮影は実際に資料を撮影する場所で機材を使用して、明かりやカメラの絞り等を自分で設定して、最もよく資料が見えるように撮影したが、フラッシュに反射するものや小さいものの撮影が難しかった。

3日目は総合展示1階の展示作成した学芸員さんから説明や工夫点など説明していただいた。その後午後にかけて文書整理を行った。私が扱ったのは寄贈された戦前の映画館のパンフレットだったが、寄贈者の好みが顕著に出ていて、資料を持っていた人の気持ちやその人が見えるようだった。2日目、3日目のように作業を行うために細かい部分まで見ていると、物を持っていた人が見えるようで、展示物として見るだけではない見方ができて面白かった。

4日目は2、3日目とは別の展示作成をした学芸員さんに説明していただき、その後午後にかけて隣にある野幌森林公園で班ごとにテーマを定めて、「自然観察会」を行った。三班に分かれて、一班・二班は木や森について、私がいた三班は「ヒラタシデムシ」「オオヒラタシデムシ」という虫に焦点を当てて自然観察会を行った。またこの時、情報の取捨選択を行うように言われ、これも言いたいあれも言いたいとなり、思っていたよりも取捨選択が困難だった。

5日目は第2テーマについて展示作成をした学芸員さんに説明していただき、その後初歩的なアイヌ語の勉強、午後はアイヌ語に関する質問が来た想定で、何冊ものアイヌ語辞典を使用しながら班ごとで解答を作成した。基本的にアイヌ民族を取り扱う博物館や資料館は、昔和人と戦ったという展示や、過去に生きるアイヌ民族についての展示が多い。しかし、学芸員さんは「アイヌ民族は過去のものではない」という考えの下展示が作成

されている。多分私も心のどこかで、アイヌ民族に対して「過去の民族」という考えを持っており、この言葉を聞いたときに確かに、とはっとさせられた。また、作業の中で初めてアイヌ語辞典を開いたが日本語の辞書とは大きく異なり、地域別の方言について一単語につき6つほど書かれており、言葉の解釈もその時点を作成した人によるものだったり、慣れないもので大変だった。質問回答を作成する際には、調べた10のことをすべて伝えるのではなく、取捨選択して1をわかりやすく、かつ質問者にどのように考えてほしいかなど多くのことを考えるのは難しかった。

6・7・8日目は実習のクライマックスとして小さな展示ケースとパーテーションを1枚貫い、班ごとで企画・構成等を行い、展示作成の作業をした。最初に何を展示したいかということから考え、求めている資料は博物館に所蔵されているのかなどを考慮して、資料を決めた。次に、資料について本や他の博物館や調査機関がネット上に上げているものから勉強をした。その後、実際に収蔵庫に行き、いくつかある実物の中からどれを展示したいかを決め、展示ケース内でどのように展示すればよいか、どのくらい砕いた説明にするか、どの言葉にルビを振るかなどについて考え、作業し展示が完成した。私の班では開拓とも関係の深い馬の「蹄鉄」に焦点を絞り、小学校中学年から高学年以上を対象とした展示を行った。班の中で文章作成班と展示作成班に分かれ、私は展示作成を行った。そもそもどのような展示が可能なのか、どのような展示であれば見やすいかという部分考えた。その後実際に作成していくと、理想とは違う部分が大きくあり、如何にできる範囲で一番いいものを作るかということ念頭において展示作成を行った。そして最終日の9日目は他のグループの展示についての説明を受けて、展示を見たが、各班の工夫とこだわりがとても面白かった。その後、展示ケースを配置する場所に移動させ、自らの手で展示ケースをボルトで絞め、展示を完成させた。

この実習では多くのことを学んだが、とりわけ心に強く残ったことが二つある。一つは自然観察会の日に書いた日誌に学芸員さんがコメントしてくださった言葉だ。それは「ただの虫だった生き物がオオヒラタシデムシやヒラタシデムシに変わりましたね。それは自然を見る目の解像度が上がったことになりますね。」というコメントだ。ものを知ることは世界を見る解像度が上がるということなのかと何か腑に落ちた感じがした。確かにこの時、普段は嫌いな虫の一つでただの大きい甲虫も、捕まえて注意深く見て、本で調べてみると他の虫とは違って見え、ただの虫に名前がついていたのだ。つまり、博物館は解像度を上げるお手伝いをする場所であることに気づいた。

二つ目は最後の4日間の展示制作である。文章という情報の取捨選択は当たり前だが、展示をする際にも取捨選択が必要だった。古い蹄鉄は錆びているため、暗い背景だと映えない。しかし、映える色にすると、展示の関係上私たちが最も見せたい部分が分かりにくくなってしまう。そのため展示台の色は見やすさを重視するのか、それともイメージのしやすさを重視するのか、何を伝えたいのか、などを考える作業は、実際に来館者が見る展示を作るという経験がなければ得られなかった作業だった。

私はこの実習をする際に「博物館を博物館側から見たい」と思っていた。多くの苦勞と工夫は想像以上だったが、その結果の展示を見て、更に博物館が好きになった。また、大学の授業では先生方が「学芸員は大変だ」というイメージをよく話されている。しかし、実習を受けてみると、確かに大変な部分が多いとは思いますが、とても楽しかった。とてもやりがいがあって、学芸員を本気で目指してみたいという気持ちになった。

最後に、この9日間は朝早くから慣れない環境で慣れない作業をこなしていく毎日で、とても大変だった。

しかし、毎日多くの新しい発見と学びがあった。普段は入れない裏側に入れて、しかも、北海道博物館は休館中だったため、博物館に誰もおらず、総合展示を自由に見て回れたのもとても楽しかった。北海道博物館の学芸員さんたちは、欲しいものがあれば収蔵庫に入れてくれ、知りたいことが載っている本をわざわざ自分の本から探してきて、私たちがこうしたいといえば、全力で考え、尽力してくださり、私たちの自由にさせてくださった。このコロナ禍で実習生を受け入れていただき、私たちが自由に学ばせてくださり、私が夢に向かう力を与えてくださった北海道博物館にはとても感謝している。

お 知 ら せ

・2022年4月採用予定

島田市博物館

(文学部 人文学科 日本史学専攻 2022年3月卒業)

総社市 文化財専門職

(文学部 人文学科 考古学・文化遺産専攻 2022年3月卒業)

小山市

(文学研究科 行動文化情報学専攻 考古学・文化遺産専修 2022年3月修了)

本学学芸員課程修了の皆様

文化財関係業務への就職・転職・勤務・その他異動の際には、お手数をおかけしますが、奥付のメールにご一報下さいますよう、よろしくお願いいたします。

学芸員課程実習室を新設しました！

2021年度から啓明館1階に学芸員課程実習室を新設しました。主として、学芸員課程の「博物館・学内実習」の授業で、屏風、掛幅、巻物、陶磁器などの教材を使用して、文化財の取り扱いを実習しています。



学芸員課程報告

2021年度博物館実習

| 大学指定実習館一覧 (5館・6名) | | | |
|-------------------|-------------|-------------|----|
| 地域 | 施設名 | 実習期間 | 人数 |
| 京都府 | 京都市考古資料館 | 9/28～10/2 | 2名 |
| | | 10/19～10/23 | |
| | 京都大学総合博物館 | 8/30～9/3 | 1名 |
| 大阪府 | 大阪城天守閣 | 10/18～10/22 | 1名 |
| | 大阪府立弥生文化博物館 | 7/27～7/31 | 1名 |
| | 大阪歴史博物館 | 8/23～8/27 | 1名 |

| 地方実習館一覧 (22館・25名) | | | |
|-------------------|-----------------|-----------------------------|----|
| 地域 | 施設名 | 実習期間 | 人数 |
| 北海道 | 北海道博物館 | 8/17～8/22、8/24～8/27 | 1名 |
| 栃木県 | 栃木県立博物館 | 7/21、8/24～8/27、8/29 | 2名 |
| | | 7/21、9/8、9/9、9/24、9/25、9/28 | |
| 東京都 | 東京都江戸東京博物館 | 11/24～11/26、11/30～12/2 | 1名 |
| 富山県 | 富山県埋蔵文化財センター | 7/27～7/31、8/2、8/3、8/5 | 1名 |
| 福井県 | 敦賀市立博物館 | 9/1～9/6 | 1名 |
| | 福井市立郷土歴史博物館 | 9/6～9/10 | 1名 |
| 岐阜県 | 岐阜県博物館 | 8/25～8/27 | 1名 |
| | 岐阜市歴史博物館 | 8/3～8/6、8/9、8/11 | 1名 |
| 静岡県 | 島田市博物館 | 7/29～7/31、8/3～8/5 | 2名 |
| | 浜松市博物館 | 8/2～8/7 | 1名 |
| 愛知県 | INAX ライブミュージアム | 11/15～11/19 | 1名 |
| | 名古屋市博物館 | 8/19～8/23 | 1名 |
| | 西尾市岩瀬文庫 | 8/6～8/8、8/10～8/12 | 1名 |
| 滋賀県 | 滋賀県立安土城考古博物館 | 8/24～8/29 | 1名 |
| 京都府 | 舞鶴市立赤れんが博物館 | 8/2～8/6 | 1名 |
| 兵庫県 | 明石市立文化博物館 | 8/17～8/19、8/21、8/22 | 1名 |
| | 辰馬考古資料館 | 11/2、11/3、11/9、11/10、11/14 | 1名 |
| 奈良県 | 天理大学附属天理参考館 | 9/13～9/17 | 1名 |
| 鳥取県 | 鳥取県立博物館 | 8/23～8/27 | 2名 |
| 岡山県 | 倉敷考古館 | 8/25～8/29 | 1名 |
| 福岡県 | 九州国立博物館 | 8/18～8/20、8/22、8/23 | 1名 |
| 佐賀県 | 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館 | 8/16～8/20、8/23～8/27 | 1名 |

立命館大学文学部では学芸員課程を設置し、所定の単位を修得した学生に、学芸員資格を授与しています。必修科目の「博物館・館園実習」では、学外の諸施設にご協力をお願いし、学生にご指導いただいております。新型コロナウイルス感染症の影響もある中、御指導たまわりましたことに、心より厚く御礼申し上げます。今後ともご指導ご協力のほど、何とぞよろしくお願い申し上げます。

呉市海事歴史科学館(大和ミュージアム)に勤務して

久保 健至(学芸員)

現在、私が勤務している呉市海事歴史科学館(以下、当館)が所在する広島県呉市は、明治期以降に大きな発展を遂げた都市の一つです。その発展のきっかけとなったのが、明治22(1889)年、呉鎮守府が設置されたことでした。鎮守府とは、海軍の持つ艦艇や兵員、武器・弾薬などを管理・運用し、管轄区域を防備することを目的とした海軍の拠点です。鎮守府の組織中、特に重要であったのが艦艇を建造するための部署(造船部)でした。当時の海軍では、当時欧米に大きく遅れをとっていた艦艇の建造技術が課題となっており、呉や横須賀などに設置された鎮守府にて、この問題に取り組んでいました。呉では、明治28(1895)年、仮設呉兵器製造所を設立。続く明治30(1897)年、鎮守府造船部を独立させ、明治36(1903)年、両者を統合し呉海軍工廠が発足しました。初期は欧米からの技術導入に頼っていた艦艇建造は、日露戦争をきっかけとして、大型艦の国産化を実現し、昭和期には当時世界最大級の戦艦「大和」を建造するに至ります。戦後は、海軍に代わり民間企業が旧呉工廠の設備・人材を引き継ぎ、大型タンカーやコンテナ船などを多数建造し、これが現在の呉市へとつながっています。

当館は、こうした呉の歴史を紹介するとともに、ここで培われた造船技術にもスポットを当てることを一つの目的として、平成17(2005)4月23日に開館しました。一般的には愛称の「大和ミュージアム」として知られていますが、戦艦「大和」そのものだけでなく、上記したような呉の歴史を軸に展示を行っています。

私は、平成29(2017)年4月より学芸員として当館で勤務させていただいておりますが、担当業務のうち特にウエイトが大きいものは、当館所蔵資料の整理・公開です。現時点で当館の総収蔵品点数は約23万点で、その中でも多くを占めるものが旧海軍艦艇の写真や図面です。これらの多くは、海軍の技術士官であった福井静夫氏が戦前から戦後にかけて収集したもので、旧海軍の艦艇写真だけでも2万枚以上あります。こうした旧海軍の技術資料からは、その当時の艦艇建造の技術レベル(船体の鋸打や溶接の技量など)や、建造の際にどのような問題(溶接した際の船体の歪みなど)が発生したのか等、戦前・戦中期における造船技術史(国内の産業技術史)を知る上で非常に貴重な情報を得ることができます。こうした戦前・戦中期における旧海軍の関係資料は、戦災や終戦時における処分により多くが失われており、当館のみに残っているものも少なくありません。

こうした資料の受入・整理に加えて、当館ではそのデジタル化と公開を進めています。対象としているのは、主に艦艇の写真と図面です。写真については、学芸員がスキャナーを使用しデータ化したものを、逐次オンラインで公開しており、現時点で19,671件です。一方図面については、当館ライブラリー内の端末のみで公開を行っており、現時点で4,747件です。

これらの資料はいずれもライブラリー内で、有料にて印刷が可能で、研究活用の利便性を上げています。今後の課題は、公開資料のバリエーションを増やすことで、旧海軍の技術資料の簿冊など、幅を広げていきたいと考えています。

こうした業務の他、もちろん展示に関する業務にも携わっています。直近のものでは、第28回企画展「海から空へー広海軍工廠と航空機ー」(期間：令和2年4月23日～令和3年5月9日)の企画・実施を担当しました。同企画展では、呉に存在したもう一つの海軍工廠である広工廠(第十一海軍航空廠)と、ここで行われていた飛行艇を中心とする海軍の航空機開発について取り上げました。呉と言えば、戦艦「大和」に代表される軍艦の建造拠点というイメージが強いですが、実は航空機の開発拠点としての側面も持っていました。展示のための事前調査には約1年をかけ、展示資料の借用や展示パネルや資料キャプションの作成など、一人で多くのことを行う必要があり、多忙を極めました。実際に展示が出来上がった時には、大変やりがいを感じました。

以上、当館のことや私自身の業務について、簡単に記しました。学芸員として勤務していることで、大学や大学院時代の知識や経験を直接的に活かす場面もありますが、それ以上に、物事の考え方や人との接し方など学生時代に身に着けた基本的なことが、大きな支えになっていると感じています。現在、学生生活をされている皆様におかれましては、学業のみならず、ご友人との会話など、普段の何気ない瞬間を大切にしてほしいと思っています。

2015年3月 立命館大学大学院文学研究科人文学専攻日本史学専修博士課程前期課程修了



当館大型資料展示室



第28回企画展「海から空へー広海軍工廠と航空機ー」の様子